



東京八王子プロバスクラ

創立 1995 年 10 月 18 日

プロバスだより

第304号

2021 年 3 月 11 日発行

編集・発行：情報委員会

2020～2021 年度 テーマ 「コロナから身を守る」「温故知新：ふるきをたずねて新しきを知る」

第 304 回例会 中止

1. 会長挨拶

皆様、コロナ自粛が継続している中、今月も例会を開催することができず、皆様と長くお会いできていない状況で寂しい限りです。そんな中、更に残念なことに2名の方の退会申し出があったことを皆様にお伝え



しなければなりません。大活躍をして頂いていた寺田昌章さんと荻島靖久さんからです。お二人には先頭に立って会をリードして頂き、本当にお世話になりました。例会が開かれていないので、直接のご挨拶を頂けません。紙面をお借りして心からのお礼を申し上げます。

今朝のNHKの俳句の時間に次の句が一位に選ばれていました。

「草萌や瓦礫ばかりと思ひしに」

長く続いている自粛生活のうちにも自然は確実に春の到来を告げています。この原稿が皆様の目に触れる頃には各地の桜の便りも届いていることでしょう。来月こそは皆様と顔を合わせて談笑できることを期待しつつ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第 304 回の例会も前回に続き中止となりましたので、理事会での審議内容を掲載しました。情報委員会

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

2. 理事会での審議内容

(1) 幹事報告

持田幹事

① 2月理事会にて2月例会の中止を決定いたしました。1月例会中止に続いて大変残念なことですが、現

状のコロナの状況では致し方ありません。3月の例会が開催され、皆さんと再会出来る事を期待しております。

② 25周年記念行事でありました「小中学校音楽活動優秀校演奏会」の3月21日開催について、事務局報告があり現状では開催が困難な状況であることが報告されました。コロナのために各学校での部活動が休止状態のようです。

③ 「創立 25 周年記念誌」を八王子市、南ロータリクラブ、市民協議会、織物工業組合などへ配布します。

④ 2022 年全日本プロバス八王子総会に向けての準備委員会の委員長に一瀬理事が任命されました。

いよいよ委員会の組織が固まり、始動することになります。クラブの総力を挙げて臨みたいと思います。

⑤ 予算面では、1月、2月例会が中止となりましたので、後期の会費集金が実施されておきませんが、例会が再開され次第、会員委員会にて集金させていただきます。よろしく願い致します。

(2) 各委員会からの報告

1) 例会委員会

齊藤委員長

2月生まれの会員に池田会員手作りのバースデーカードを贈る予定でしたが、例会中止のため郵送することにしました。次の2名の方々です。

根本洋子会員、鈴木はるみ会員。

2) 情報委員会

内山委員長

「卓話」、「25周年を振り返って」、「同好会報告」については例会が中止された場合、プロバスだよりに掲載します。

今月のホームページへのアクセス数は192件でした。

3) 会員委員会

寺山委員長

寺田昌章会員が一身上の都合により12月31日付で退会しました。現在会員数は57名（うち休会1名）。

3月例会開催時に後期会費 14,000 円を徴収予定です。

4) 研修委員会

飯田委員長

例会中止に伴い卓話の話し手への交渉は前月同様厳しい状況です。

5) 地域奉仕委員会

馬場委員長

生涯学習サロンが2年に亘り中止となったので、会員からの預かり金は次回例会時に返金する。

生涯学習サロンの予算書の収支については現在整理中である。

6) 交流担当

一瀬理事

① 全日本プロバス協議会のホームページの交流サイトに八王子プロバスクラブの「プロバスだより」が今月より毎月掲載される。

② 「創立 25 周年記念誌」を各プロバスクラブに送付した。

③ 2022 年に開催される全日本プロバス八王子総会の準備委員会を発足させ、歓迎のための諸策を進めていく。準備委員会名簿（案）については3月例会時に報告する予定です。

7) 宇宙の学校

下山PJリーダー

3月末までには年度計画を立案する予定である。現状では、ボランティアの学生を募集するにしても、大学側がボランティア活動を中止している状況であり、様々な困難がある。小規模でもどうすれば継続できるか検討中である。



「生類供養塔と日本人」

土井 俊玄

ヒトと動物とのかかわりは人間の歴史と共に古い。ヒトは動物を食べ飼いならし、そして使役して来た。現代の日本では「過熱した」ペットブームに象徴されるように犬や猫はもちろんのことへビヤトカゲまで愛玩されるようになってきた。ペットが家族として、時にはヒト以上の家族



として迎え入れられているとって過言ではない。

一方食生活の変化により、欧米型の食事も取り入れられ、食肉の消費量は増大してきた。健康管理の面でいうと、問題点はあるものの肉食は「生活の豊かさ」の指標と言ってもよい。スーパーにはきれいに処理された牛肉・豚肉・鶏肉・様々な魚や貝などが、オーストラリア・デンマーク・ブラジルやサウジアラビアなど世界中から輸入されている。

このように私達は動物の命を頂いているのであるが、スーパーに並べて売られるまでの経過は全く知らされていないし、また知りたくないの、現代は動物の命を奪うという罪悪感を感じないようになっているのである。しかし昔は違った。私は牛や豚の屠殺の現場は見た事はないが、隣のおじさんが鶏を「つぶす=殺す」場面を見てしまったことがある。鶏の両足を持ち逆さまにぶら下げ、あばれないように両羽をしっかりとおさえて、のど元を出刃包丁で切り、血液をたらしながら鶏の死ぬのを待つ。私は大変驚いた。心臓が高鳴り中々止まらなかった事を憶えている。

イスラム教のハラールというのはアラビア語では、イスラム法で「許された事柄」を言い、「禁じられた事柄」をハラームと言う。イスラム法では豚は食べてはいけない。これがハラームである。食べてよい動物でも、その殺し方や解体処理の方法に一定の決まりがあり、それに従わないものは食べてはいけないのである。逆に言えば、そのきまりに従って動物の体を処理したものは食べてよいのである。このことは、アッラーの神に動物を殺して食べてよいという許しが与えられているという事になり、動物の命を奪うことの罪悪感をなくしたり、薄めることに宗教の役割が与えられているという事なのであろう。

ヒトは一般的に動物の命を奪うことに対し全く罪悪感を感じないということがないようだ。その延長線上にヒトを殺すことが「最高の罪悪」だとの共通認識がある。しかし、戦争とか制度としての死刑はヒトを殺しても罪悪感を感じなくてよいという場面も出てくるが、しかし、それとても全く罪悪感なしにはられない。

そこで日本では、全国的に生類供養がさかんに行われている。アイヌの人々の「イヨマンテ」もその一つである。この生類供養は動物の命を奪い、いただく際の罪悪感を薄める「装置」ないし「行為」または、「儀

礼」と考えられるのである。日本では生類の供養塔が全国的に大変多い。クジラ・クマ・シカ・イノシシ・ウシ・ウマ・ウミガメ・サカナ・カイ・カニ等々、更にカイコ・イナムシ等の供養塔もある。九州で見られる魚の供養塔には、様々な名称が刻示されているが「江河魚鱗離苦得楽塔」とか「一字一石大乘妙典魚鱗塔」、「貝之供養塔」などである。「一切魚鱗皆俱成仏」と碑の側面に記されているものもある。金子みすゞという女流詩人には「大漁」という詩や「鯨法会（くじらほうえ）」という詩があり、鰯の命や鯨の命への哀悼の心を詠っている。

イノシシとシカはよく一緒にされることがある。もともと「シシ」は漢字では「肉」「宀」が使われ、「旨い肉のこと」で「シシ」とかなで書いて用いる場合シカとイノシシの区別をしないことが多いのである。猪は「イノシシ」、鹿は「カノシシ」ともいわれ、九州での供養は「白鹿権現(シシ権現)」へ、その骨を納め祭祀するのである。

その他、稲に害をあたえる害虫でさえも「蝻蝗衆蟲（しゅうこうしゅうちゅう）供養塔」を立て供養するのである。

日本では、家畜・家禽と野生の鳥獣の命は区別しない。しかし欧米は区別しているように思う。

我ら昭和世代(4)

杉山 友一

また一つ我ら昭和世代にとって深く考えさせられるテーマが浮上しました。去る2月にコロナ禍での緊急事態宣言の発令中、国中が落ち着きを欠いているこの時期に、世界を巻き込んで我が国に大きな課題が突き付けられました。事は外でもない一連の東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森会長辞任劇的一幕でした。会長さんの年齢は80代とまさしく我々と同世代で、突き付けられた課題はジェンダー(社会的、文化的につくられた性別)平等問題でした。今回はっきりしたことは、アメリカ、中国に次いで第3位の経済大国日本のジェンダーランキング(2020年)は、世界経済フォーラム(WEF)の発表によれば、G7ダントツの最下位で、中国や韓国よりも低く世界153か国中121位で史上最低ということでした。例えば中国も男女差別がある国のように見えますが、高等教育、教授・専門職の分野では



世界ランク1位、国家議員数ランクでも62位とかなり高い。日本では、官民挙げて広くリーダーシップを発揮すべき多くの分野でダイバーシティ(多様性・人権問題や雇用機会などの均等性)は著しく低い状態がずっと続いているということです。

さて、初期3年の金融恐慌、6年の満州事変を踏まえてスタートした日本の昭和という時代、16年には真珠湾攻撃を仕掛けてアメリカ・英国に宣戦布告、ところが4年後の20年にはあえなく敗戦でした。そして戦後は心機一転、民主国家として40年の歳月をかけて遂に経済大国としての地位を獲得します。しかし、やがて昭和バブルの崩壊後に始まったその後の平成30年間には、実は全ての社会的な背景がすっかり変わってしまいました。人口構成の大きな変化、共働き家庭の常態化、核家族の増加、時代にマッチング出来ない人手不足、非正規急増の雇用形態、三次産業が何と70パーセントを占める産業構造の大変化等々です。こうした点については、学者先生、専門家たちが今にしてようやく、昭和人には経験的知識(暗黙知)がこびりついていて、こうした時代の大きな変化にうまく対応出来ず、思考回路の転換が出来ずに来たことが問題の核心との指摘をしています。言われてみれば我ながら昭和の身につつまされる耳の痛いご指摘だと感じています。この点で今回の国の表舞台での森会長辞任劇は全ての昭和男子にとって良い薬になったと言えるかもしれません。現役時代は、男は仕事、女は家庭、黙って俺についてこいと言わしめた典型的な昭和人、そんな自分が今ここにいるのです。思い返せば昭和20年、戦後いち早く敷かれた公立学校での男女共学制度の下での育ちなのですが、やはり明治、大正の大先輩たちの男ぶりを見本として人格形成してきた嫌いがあり、男社会という「無意識の偏見」の下で今日まで時を刻んできたということかもしれません。因みに、過日の「プロバスだより2月号」への我が寄稿文「我ら昭和世代(3)」も、今にして思えば男社会の暗黙知の目線との誹りを受けるかもしれません。反省の意を込めて今ペンを走らせています。2月13日の朝日新聞の天声人語に「偏見は社会の現実により形作られる面がある。そしてその偏見が社会の変化を遅らせてしまう」とし、結語に「足を踏みつけている人はその痛みは分からない。筆者も含め男たちが我が身を振り返り、自分の中にある偏見を見つめる。急ぐべき道である」と記されていました。やはり昭和は既に遙か昔、以って瞑すべし。長生きするには然るべ

き知恵が要ります。

短歌との出会い

短歌との出会いは、2008年に短歌教室に入ったのがきっかけだった。後で知ったのだが、その講師が「運河の会」(短歌結社)の代表長澤一作先生だった。毎月2首を提出して、先生の指導を受けるわけだが滅茶苦茶厳しい先生であった。先生は良い短歌を覚えさせたい一心で生徒扱いではなく弟子のようなやり取りだった。これは「狂歌だ」、「川柳だ」、「歌が軽い！」などと鋭く注意を受けた。当時会社の社長をやっている、自分を叱ってくれる人がいない環境で短歌教室に来ると、背筋がまっすぐになり、批評を受けて緊張したが教えは極めて新鮮で勉強になった。先生はアララギ派の斎藤茂吉、佐藤佐太郎を師としていた。文語、旧かな遣いの写実、写生の短歌で新写実を目指している。

何年かして先生から、「運河」に入らないかと勧められた。入会すると毎月10首を出詠して機関誌に6首掲載される。しかし、当時は月に2首つくるのに精一杯であり、躊躇したが2012年入会した。既に1,000首は出詠したことになる。叙情、叙景を主に自作詠を入れると2,000首になる。気に入った歌が出来たら、墓石に彫って残そうと思っている。

持田 律三



☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆



奈良依水園のひな人形。

(写真 雑誌淡交より借用)

奈良の依水園では京の老舗人形店の制作によるひな人形が期間限定で展示されています。横3.6m、奥行0.7mの水平台座の中央に曲水を表し、一方の岸に八体、対岸に七体、計十五体の人形を配し、公家の男女による「曲水の宴」の情景を表現したもの。是非一度鑑賞したいものです。(M.U)

俳句同好会便り

私の一句〈二月の句会から〉

河合 和郎

三密を回避するため二月も集まっての句会は開けず、紙上句会となった。自宅に籠っての作品作り。集中できた成果が力作を生んだ。

さりげなく別れ二月の湖眩し 飯田富美子

どんな別れかは問うまい。「湖眩し」の措辞にその想いが込められている。乙女心はいつまでも。

あれもこれも先送りする寒の内 馬場 征彦

寒さにかまけて気楽な日々を送る。誰もがうなずける日常をうまく一句にまとめた。

重たかる茅舎に積もる雪二尺 野口 浩平

この冬、雪国では再三の大雪に見舞われた。「重たかる」の呼びかけ調が柔らかくていい。

豆撒きや鬼はともかくコロナ外 東山 榮

世界中が収束を願って止まないコロナ禍。鬼やらいの豆でコロナを追い払いたいと願う作者。

水垢離を取つて月夜の寒詣 矢島 一雄

「寒詣」は寒の三十日の間の夜に、神社や寺に祈願する行のこと。東京の深川不動が知られている。

一筋の光となりて蠟梅花 池田ときえ

蠟梅の咲くイメージを「一筋の光となりて」と巧みな表現。香りまでが感じられる佳句となった。

囲炉裏端みしり大屋根きしむ音 田中 信昭

雪国の風情満点。今は昔の追憶の景が甦る。「大屋根きしむ音」に豪雪地帯の様子が鮮やかに。

蠟梅の日向道あり医者通い 下山 邦夫

実景をしっかりと捉えて過不足のない佳句に仕上がった。「蠟梅の日向道」の措辞がうまい。

予定なき手帳の日々や寒き春 河合 和郎

コロナ禍により日常の生活リズムがすっかり狂ってしまった。予定の無い手帳の日々が寒い。

編集後記

寄稿文を三題採用させて頂いたことで通常より頁数が少なくなりましたが、なんとか発行出来ました。 内山雅之

